

「吉野山の文化資源を永遠に

---未来を仰ぐ本多静六博士の提言」

公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員 岡本貴久子氏著

令和4年(2022)3月1日 本多静六博士を顕彰する会 発行

本多静六通信第30号では

「吉野山の文化資源を永遠に 未来を仰ぐ本多静六博士の提言」と題した文を
公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員 岡本貴久子氏が発表された。
本多静六博士は「日本の公園の父」と呼ばれ、慶応2年(1866)現在の埼玉県久喜市に生まれた。日本初の林学博士として日本の造林学・造園学の基礎を築くとともに、産業振興など多方面にわたり活躍した。東京の日比谷公園、明治の森をはじめ、埼玉の大宮公園など日本各地を代表する数百にも及ぶ公園の設計に携わった。久喜市の名誉市民であり、本多静六博士顕彰事業の一環として「本多静六通信」が発行されている。

古来より、吉野の桜は蔵王権現の神木であり、滅罪供養のため桜を献木・寄進する風習が起こり、植樹が進み爛漫の桜の山となった。ところが、明治時代に入り「王政復古」で神仏分離令や修験道廃止令に伴う廃仏毀釈は凄まじく、古く神仏習合のもとにあった蔵王権現の信仰を揺さぶり桜の風景や古蹟名勝を破壊した。

そうした危機的な事態にあって、失われる勝地古蹟を保護する運動が発生し、明治27年(1894)吉野山県立公園の指定を受け「桜を守る会」が発足した。

しかしながら、雑木や杉檜林に僅かに桜の根株が残るのみと荒廃していた吉野山は、「山づくりは百年の計」といわれるように、復興の兆しが明らかになるまで年月を要した。

大正10年(1921)頃、本多博士の見た吉野の桜樹は枯れつくして僅かに上、中、下の千本と奥の千本をとどめるに過ぎず、樹勢振るわず、太閤秀吉が大観楼会を開いた場所は一民舎があるのみで付近は、一面杉又は雑木林と化していた。

このような中で、大正10年奈良県で大日本山林会第31回全国大会が開かれ、吉野山視察に行き、山の様子を見た本多博士が吉野の文化資源である桜の風景再生のため「吉野山の桜制復古(おうせいふっこ)」を提唱した。王政復古を振ったものである。本多博士の発起で、大日本山林会視察団員の賛同を得、桜樹の寄進が行われた。

本多博士が提言した「桜制復古」は、先人によって永く尊ばれてきた価値観を再評価したところに構築されたもので、次世代へ繋ぐために、わかりやすいスローガンとなった。未来へ向けた博士の提言から100年を数える令和現代、「祈りと実践」が繋がれ今日の桜となっている。



吉野山・吉水院の森 昭和8年頃の写真
禿山や田畑と化した吉野山に驚く。
写真提供：成瀬匡章氏